

安然における六即と即身成仏

亀山隆彦

一 序 論

本稿では、数ある安然（八四一―没年未詳）の著作の中でも『即身成仏義私記』（以下、『私記』）と『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』（以下、『菩提心義抄』）に着目し、二十代後半から四十代にかけて、その即身成仏がいかに展開したか考察を試みる。

安然の即身成仏というと、清水谷恭順氏以下、浅井円道氏、木内堯央氏、池山一切円氏、兼子鉄秀氏、三崎良周氏、大久保良峻氏、土倉宏氏等、少なくない数の論考が発表済みである。これら先行研究を通じて安然の教説の構造、先行する最澄や円仁の主張との関連も、おおよそ解明された。ただ、それで問題がすべて解決されたわけではない。前述の論考では『私記』か『菩提心義抄』、つまり安然の前期か後期の何れかで主張された即身成仏の個別的な分析が主で、その二十代後半から四十代、つまり前期から後期に向けての展開という視点に関しては、末木文美士氏と宮崎京子氏以外にまとまった考察は提出されていない。

それ故、安然の即身成仏について、ある重大な事実が未解明のままである。それは、前述の前期から後期にかけて『私記』でいうところの「教」だけでなく「観」の面でも、安然の即身成仏は重大な展開を遂げているということである。

冒頭の記述から『私記』は、所謂『法華経』の龍女成仏を主題に「教」の面から即身成仏を議論する前半部、および『摩訶止観』等に立脚して「観」、つまりその実践を考える後半部に大別される。池山氏を踏まえて少し詳しく解説しておくと、前半Ⅱ「教」では、主として「法華経妙解の教の面」から即身成仏が論述される。具体的には、最澄『法華秀句』「第八即身成仏化道勝」の議論を出発点に、天台円教の即身成仏に關する計四十五の問答が積み重ねられる。¹ 続いて後半Ⅱ「観」では、計十九の問答を通じて「円頓止観による即身成仏」が論じられる。その議

論の中心は「六即（理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、究竟即）全てが止觀であり、菩提であり、成仏である」という「六即成仏」である。⁽²⁾

以上の「教」と「觀」の中でも、前者＝即身成仏の「教」が『菩提心義抄』巻一で検討され「一生成仏」と「凡夫即身成仏」の二種の即身成仏へ展開することは、先行研究でも検討済みである。一方、後者＝即身成仏の「觀」がどうなったかという点『普通授菩薩戒広釈』に「円乗戒証受戒之日、即身六即成仏」と記される等、先述の『私記』以降も議論が継続されたことが、宮崎氏等により指摘される。⁽³⁾ ただその六即成仏が『私記』の内容そのままだったか、あるいは「教」のような展開を見せたかどうかは考察されたことがなく、明らかではない。

そこで『菩提心義抄』の内容を改めて検討すると、巻一ではなく巻四に六即成仏に関するまとまった記述が確認され、そこで同成仏は『私記』にはなかった新たな概念と結びつき、独自の展開を遂げていることが了解される。その展開がどのようなものかは、次に引用する末木氏の言葉との対比で解説できる。

ここで理即が除外されていることは注目に値する。理論的に言えば、理即成仏が言われてもよいようであるが、それが除外されるのは即身成仏があくまで実践の問題だからである。理即においては、「理」としての仏性の内在性は認められても、それは現実に実現されたものではない。理即における即身成仏が認められるならば、修行そのものが不必要なことになろう。安然においては全体的に本覚思想への傾向が一気に強まるのであるが、本書のこの点においては、本覚思想の修行否定論には歯止めがかけられている。⁽⁴⁾

『私記』における即身成仏の「觀」、その中の六即成仏の特質について右のように指摘される。これに対して『菩提心義抄』の六即成仏では、第一に「理」としての仏性の内在性」を越えた「理即における即身成仏」が主張されるのである。そして、その主張にあたって『蓮華三昧經』の本覚讀や金剛界曼荼羅を構成する三十七尊のような密教的要素に加えて、同じく安然の『真言宗教時義』（以下、『教時問答』）に説かれる四一教判の核となる「一心一心識」や「一切一心識」のような心識概念も登場する。

あるいは、このように見た時『菩提心義抄』巻四の六即成仏は、安然後期の代表的思想とも考えられる四一教判、また『菩提心義抄』巻二で

議論される「草木自成仏説」とも、構成要素の点で非常に近い位置にあるとも考えられる。本稿では、まさにその安然の後期の思想の展開を意識しつつ『菩提心義抄』で議論される六即成仏の特質について、分析を進める。

安然の即身成仏の展開について、宮崎氏は「若い時代に著した『即身成仏義私記』によっていると考えられる」と指摘する。⁽⁵⁾確かに『私記』で示された即身成仏の「教」と「観」の構造がその後も維持され、諸著作で六即成仏に繰り返し言及することを考えると、宮崎氏の指摘は正しい。ただ同じ「教」や「観」、六即成仏といえども、その内実は大きく異なる。本稿では以下の構成で、その点を明らかにしていく。この序論に続く第二章で『私記』の六即成仏がいかなるものか確認し、その結果を踏まえ、第三章で『菩提心義抄』の六即成仏を検討し『私記』のそれとの相違を明らかにする。

二 『私記』にみる六即と即身成仏

1 『私記』の成立時期と梗概

詳しい検討の前に『私記』の成立時期を改めて確認しておく、先ず注意すべきは、末尾に付された貞観五年（八六三）六月の法華会に関する記事である。この中で安然は、師である円仁を「大師」と呼んでいる。⁽⁶⁾浅井氏を筆頭に様々な先行研究で指摘されるように、円仁に「慈覚大師」の諡号が贈られるのは、貞観八年（八六六）七月である。そこから『私記』の成立は、早くとも八六六年以後と先ず推測できる。⁽⁷⁾

同じく末尾の記事では円仁が、貞観五年の法華会で起きた即身成仏の論争を受けて、それに関する講義を定期的に開催したとも記している。⁽⁸⁾その円仁に独自の主張が『私記』の本編にも頻繁に登場することも考えると、同じく浅井氏や池山氏が示唆する通り、講義と『私記』の内容は深く関係しており、前者が後者の元になったとも考えられる。⁽⁹⁾だとすると、その執筆の時期も、円仁が没する八六四年からそう離れていないのではない。以上の事実を踏まえ、本稿でも『私記』の成立時期は八六七〇年頃、安然が二十六〜七歳頃の著作と理解しておく。

次にその梗概だが、次章で取り上げる『菩提心義抄』とは異なり、安然『私記』にははっきりとした章立ては存在しない。ただ池山氏と末木氏を筆頭に、いくつかの先行研究で推定される通り、本書は内容から大きく前後に二分できる。その点については、次に引用する序文中にも分かりやすく示されている。

夫以妙法蓮華者一切如來微妙因果、摩訶止觀者一切菩薩速疾之徑路。乘此乘者白牛運載直至道場、觀此觀者神通飛騰疾行寶處。是以八歲龍女頓坐正覺之台、三生之弟子速入正聚之位。(中略)皆不捨身不受身、悉於現身得成仏。(中略)弟子幸値如實弘經之師、親聞即身成仏之道、如説信受、如説習學。欲知甘露之味、敬集醍醐之文、教觀並弁、違順双通。願也使聞思修之者作三六即是之仏。⁽¹⁰⁾

序文によると『法華經』は、一切如來の玄妙なる「因果」で、智顗(五三八―五九八)『摩訶止觀』は、一切菩薩の「速疾之徑路」である。前者の『法華經』に明かされる乗り物に乗れば「白牛」に運ばれてさとの場まで一直線であり、後者の『摩訶止觀』が説く止觀を觀ずれば、神通力で即座に「宝處」に至ることができる。これら『法華經』と『摩訶止觀』の力によって、わずか八歳の「龍女」も「三生之弟子」も速やかにさとりを得る。今の身を捨てず新たな身を受けず、その身そのままに成仏する。つまり即身成仏できるのである。

引き続き序文では、以下のようにも述べる。第一に「弟子」(＝安然)は、正しく經典を弘める「師」に出会い、その「即身成仏之道」を直接聞いて教えの通りに学んだ。その上で「甘露」のような教えの味をさらに知りたいと思い「醍醐」のような素晴らしい經論の文を集め、即身成仏の「教」と「觀」を並行して論じ、その「違」と「順」を互いに会通した。この内容を聞き、考え修行したものが「六即是之仏」を達成することを強く願う、と主張される。

詳しい内容をいえば『私記』は、計六十八の問答から構成される。序文で示唆される通り、その前半の第三―四十五問答では『法華經』に基づく即身成仏の是非、例えば「龍女成仏」の解釈が詳論される。一方、後半の第四十六―六十四の問答では『摩訶止觀』に説かれる実践、例えば止觀や六即を取り上げ、即身成仏から見た意義が明かされる。⁽¹¹⁾同じく序文では『法華經』を中心とする教理問答を指して「教」、また『摩訶止觀』を中心とする実践・修行論を「觀」と呼ぶ。先に詳しく述べた通り、この二者の中の「觀」が本稿の主題である。

さらに詳しくいえば、その「觀」の中の六即成仏について議論するが、右の『私記』の序文を見ると「觀」と「教」を共に収めた修行者の到達点が「六即是之仏」、つまり六即成仏と呼ばれる。これは先行研究でも十分に議論されていないが、六即成仏は『私記』が規定する「觀」の領域を越え、安然の即身成仏にとって中核となる概念だったのかも知れない。そこまで議論を進めることは出来ないが、次節ではこの六即成仏

に關する『私記』の主張がいかなるものか、具体的な記述に沿って確認する。

2 『私記』にみる六即と即身成仏

以下『私記』における六即成仏について、検討を進める。最初に注目すべきは、本書の第四十八問答である。先行する第四十六・七問答で止観による即身成仏の可否を論じ、さらにその証文を確認した後、第四十八問答で次のように述べる。⁽¹²⁾

問、位既有^レ六、止観方六耶。答、理雖^二不同^一而猶是理性止観、名字、観行、随聞随観、乃至究竟皆名^二止観^一。即如^レ所^レ問。⁽¹³⁾

即身成仏の実践とされる止観と六即の關係に関する問答である。周知の通り、六即は天台円教の立場から主張される、さとりに到達するまでの六種の階梯のことで、①理即、②名字即、③観行即、④相似即、⑤分証即（分真即）、⑥究竟即の六つを指す。この先の記述とも深く関わるので、六即それぞれの内容も簡単に説明しておく。次の通りである。

①理即は、衆生が「理」として仏道に「即」していること、つまりその一念の心が如来藏の理であり、さとりの智を具えていることをいう。
②名字即は、その究極の理、仏陀の真実のさとりを言葉で了解し、深く信じることである。③観行即は、名字即のように言葉で理解するだけでなく、瞑想を實踐し、理と智慧、心と言葉が正しく合致した状態をいう。④相似即は、同じく瞑想に習熟した修行者が徐々にさとりに近づくことである。⑤分証即は、ここに至るまでの修行で得た仏のさとりに相似した智慧の力で十住位に入り、少しずつ無明を除いて等覺に到達し、そこから仏の智慧に近づくことである。⑥究竟即は、その分証即も超えて妙覺に入り、究極のさとりに至ることをいう。⁽¹⁴⁾

六即の理解について別角度からも付言しておく、それらは、一方で六つの階梯として段階的な修行の深まりを表すものだが、他方で一つ一つの階梯が菩提、止観、如来と同一視され、修行がそのまま（即）さとりのであることを示す教えでもある。末木氏の言葉を借りれば、それは天台円教の修道における「段階否定性と段階性を巧妙に接合した理論」ともいえる。⁽¹⁵⁾

以上の解説を踏まえて第四十八問答に戻ると、先ず即身成仏の實踐である止観にも同じ位があるかと問われ、それに対して根本の「理」は不

同と述べた上で、①理即（「理性」）、②名字即、③観行即から⑥究竟即に至るまでのすべて階梯が止観と名付けられると答える。言い換えれば、止観の中にも理即から究竟までの六即があるということである。ここまでの問答を踏まえて、続く第四十九問答では、六即、止観、即身成仏の三者の關係に関して議論がなされる。以下に引用する通りである。

問、^フ就^ニ何^ノ位^ニ即身成仏^{スル}耶。答、初後皆是止観、初後皆是仏也。但理即理仏不^レ論^ニ成^セ不^一。名字已去皆得^ニ名^ヲ為^ニ即身成仏^ト。故文云、理即者（中略）是名^ニ理即菩提心^ト。亦名^ニ理即止観^ト也。名字即者（中略）是名^ニ名字即菩提^ト、亦名^ニ名字即止観^ト也。観行即者止観明了^ニ理恵^ト相應、心口相應、観行菩提、亦名^ニ観行止観^ト也。相似即者（中略）是名^ニ相似止観^ト也。分真者（中略）是名^ニ分真菩提^ト、亦名^ニ分真止観^ト也。究竟即者（中略）是名^ニ究竟菩提^ト、亦名^ニ究竟止観^ト止文。弘決云、理尚乃得^レ名^ニ菩提及以止観^ト。況復名字乃至究竟^ニ弘決^ニ當^レ知^ル、理即則理即是如來^{ナリ}。名字即即是如來^{ナリ}。乃至究竟即則是如來也（後略）^{（16）}。

理即から究竟即までの六位の何れで即身成仏するかと問い、それに対して、六即は最初から最後まですべて止観であり、すべて成仏と解答する。ただし、その中の理即、つまり如来蔵の理の内在に関しては成仏・不成仏の別は問題にならない。それ以後の名字、観行、相似、分真、究竟の五つは、すべて即身成仏と名づけられる、とも述べる。

また、その主張の典拠として、智顗『摩訶止観』と湛然（七一―七八二）『止観輔行伝弘決』および『法華文句記』から、いくつか文が引用される。それらをまとめると、理即から究竟即までの六つは等しく菩提、および止観と名づけられる。したがって、六即のすべてが如来そのものとみなされる。

さて末木氏は、この第四十八―九問答の流れの中で理即の即身成仏に関する主張が巧妙に避けられていることに注目し、本稿の序論で引用した文のように評価している^{（17）}。改めて末木氏の主張をまとめると、次の通りである。

①『私記』において即身成仏はあくまで実践の問題であり、その中で理即の即身成仏、つまり「理」として如来蔵や仏性が内在することは

理論的には考察されても、現実の成仏の可否とは関係ない。

②もし理即の即身成仏を認めてしまうと、修行そのものが不要になりかねない。この点について『私記』では、いわゆる本覚思想的な修行否定論に歯止めをかけているとも考えられる。

他方で『私記』から数十年を経て執筆された『菩提心義抄』では、密教の曼荼羅を含む新たな概念を大幅に導入し、理即の成仏の充実が図られる。その点を次章で詳しく検討していく。

三 『菩提心義抄』における六即と即身成仏

1 『菩提心義抄』の成立時期と梗概

同じく『菩提心義抄』の成立時期と梗概を本節で確認しておく。先ず成立時期だが、こちらに関しては卷一の冒頭に次のような記述が見える。

小僧安然略記^シ見聞^ヲ以為^ス問答^ト。或^ハ勘^ハ會誠文^ヲ。或^ハ依^テ准理趣^ニ。為^レ明^ニ教理之淺深^ヲ。對^ニ弁^{スル}五教^ヲ。蓋^シ善無畏義積之意、為^レ決^ニ行果之疎密^ヲ。簡^ニ摺^ヲ。四釈^ヲ。是不思議義疏之旨^{ナリ}。若有^シ三万^ノ一契^ハ合^{スル}。仏心^ニ願^{ハクハム}。令^ニ自他^ヲ不^レ退^セ菩提^ヲ。若^{クハ}違^フ教理^ニ。覽^レ者直刊^ス。又於^ニ此中^ニ多^ク載^{セル}。兩部大法秘密行相^ヲ。故^ニ非^ハ入法之人^ニ不^レ得^ス輒^ニ入^ル其手^ニ。于^ニ時^ニ仁和元年十一月二十日^ニ抄畢^ス焉^{（18）}。

安然による『菩提心義抄』序文である。この序文に続く形で本書卷一の構成が論じられるが、その前に仁和元年（八八五）十一月二十日にこの書物を編纂し終わったと明記される。この仁和元年の日付だが『菩提心義抄』の最終巻にあたる卷五の末尾、すなわち「菩提心義略問答抄巻第五」の尾題が記された後にも「仁和元年十一月二十一日略抄畢^{（19）}」とある。これら記述から『菩提心義抄』の成立時期は、八八五年十一月二十日前後、すなわち安然四十代半ばの著作とみて間違いないだろう。

安然における六即と即身成仏

引き続き、序文の内容を簡単に紹介しておく以下の通りである。「小僧」＝安然是、自身が学んできた教えをまとめ「問答」(『菩提心義抄』)とした。その中で様々な經典に基づき、諸教理の浅深を明かすために「五教」を弁別する、また修行の果の優劣を競うために「四釈」を選択したが、何れも「善無畏義釈」の意であり「不思議義疏」の主旨である。もしこれら記述が仏の心になっっているなら、自他共に菩提心から退かないことを強く願う。この書物には「両部大法」の秘説が多数掲載される。したがってその門に入っていないものは、たやすく読むべきではない。仁和元年十一月二十日に本書を編纂し終わった、と主張される。

引用文中の用語についても簡単に解説しておく、土倉氏も確認する通り「五教」は、安然独自の教判概念である藏通別円密の五教である。⁽²⁰⁾ 続く「四釈」は密教独自の解釈法、①浅略釈、②深秘釈、③秘中深秘釈、④秘秘中深秘釈からなる四重秘釈を指す。また「善無畏義釈」は『大日経』を漢訳した善無畏(六三七―七三五)と一行(六八三―七二七)による同経の注釈書『大日経義釈』を指し、「不思議義疏」は、新羅僧の不可思議(生没年未詳)が著した『大日経』巻七の注釈書『大毘盧遮那経供養次第法疏』を意味する。残る「両部大法」は、いうまでもなく胎藏と金剛界、『大日経』と『金剛頂経』を核とする両部の教えである。

この序文を見るだけでも『菩提心義抄』執筆時の安然の立場・視点は、伝統的な天台円教のそれから密教へ大きく転換していると理解される。先に検討した『私記』では、主に前者の天台の立場から即身成仏の教理的整合性、また実践可能性が議論される。それに対して『菩提心義抄』では、後者＝密教の経論の記述または視点に依拠し「菩提心」という主題をめぐって議論が展開される。浅井氏は、その内容の全体を次のように簡潔にまとめている。

(前略) 序および巻初の弁によると、発菩提心論の行願・勝義・三摩地の三種菩提心を、菩提心義にならって釈名・体性・一異・相状・行願の五門に分けて解説する構成をとり、胎藏界・金剛界の両界の理・教・行・証を藏通別円の四教と対しつゝ解説している。係年は、序(中略) および巻五末(即ち第十卷)の巻尾によれば「仁和元年(八八五)十一月」と(後略)⁽²¹⁾。

本書『菩提心義抄』では、龍樹撰と伝えられる『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(菩提心論)、および作者不詳『菩提心義』(発菩

提心義の内容・構成に基づいて、菩提心の意義と実践に関する議論が行われる。その『菩提心義抄』の組織、詳しい章節の情報に関しては、末木氏が次のようにまとめている。⁽²²⁾

〔卷二〕

I 開門差別——『菩提心論』は行願・勝義・三摩地の三門に分け、『菩提心義』は上記の五門に分ける。その二論の体系の相違を論じる。

II 五門に分けて論ずる

一 名義を積する

1 通釈——総論的に「菩提心」の名称について論じる。

2 別釈——①行願 ②勝義 ③三摩地

〔卷二〕

二 体性門——1 総釈 2 別釈（①行願 ②勝義 ③三摩地）

三 一異門——1 総釈 2 別釈（①行願 ②勝義 ③三摩地）

四 相状門——1 行位の相を明らかに 2 功用の相を弁ず

五 行願門

1 因縁——菩提心を起す根拠。

2 発人——菩提心を起す主体。この中で草木成仏が論じられる。

3 発心——発菩提心の内容を論じる。

4 立行——発菩提心に立つ実際の行を論じる。

①大日経の立場

②金剛頂経の立場

安然における六即と即身成仏

a 行願門 b 勝義門

〔卷三〕五 c 三摩地門——ここで各種の密教の実践が説かれる。

さて、これら章節の中、卷一「一 名義を釈する」中の「2 別釈」、さらにその中の「③三摩地」に即身成仏に関するまとまった議論が存在する。具体的には『金剛頂経』に説かれる「五相成身」と呼ばれる密教瞑想法を解釈する中で「即身成仏義」を弁ずるとして、次のように主張される。

問、抑言^フ即身成仏^ト一者、為^ム下即於^ニ一生^ニ成仏^{スト}、為^ム二凡夫即身成仏^{スト}。答、両義俱得。即於^ニ一生^ニ成仏^{スルハ}如^レ前^ノ。又凡夫即身成仏者、如^シ即身成仏義云^フ。六大無礙^{ニシテ}常瑜伽^{ナリ}体、四種曼荼各不^レ離^シ相、三密加持^{シテ}速疾現^ル用、重重帝網名^ニ即身^ト。無礙、法然具^ニ足薩般若^ヲ。法仏成仏、心数心王過^キ利塵^ニ。無数、各具^ニ五智無際智^ヲ。輪円、円鏡力故実覺智^{ナリ}所由。此四句明^ニ成仏^ニ二字^ヲ。

引用文によると、即身成仏の中にも「一生成仏」と「凡夫即身成仏」の二義がある。前者⁽²⁴⁾「一生成仏」は、この文に先んじて議論される五相成身観を実践し『法華経』の「龍女成仏」のように今生でさとりを得ることを指す。対して後者⁽²⁵⁾「凡夫即身成仏」の内容として、安然は空海『即身成仏義』冒頭の二頌八句、すなわち「六大無礙^{ニシテ}常瑜伽^{ナリ}」以下の文を引用する。末木氏も指摘するように「凡夫即身成仏」は、空海の即身成仏に具わる「本来成仏」の側面を言い換えたものである⁽²⁶⁾。

引き続き『菩提心義抄』卷一の同箇所では「問、頌意云何」と問い、同じく『即身成仏義』の二頌八句のさらに詳しい解釈を明らかにする⁽²⁷⁾。大久保氏も示唆する通り、一連の記述には『私記』に説かれる即身成仏の「教」に深く関わる部分があり、本文は、その密教的拡張を試みたものとも推測される。その点を踏まえて『菩提心義抄』では、同じく即身成仏の「観」の拡張も試みているとも考えられる。次節で『菩提心義抄』卷四の六即に関する記述に注目し、この問題に関して考察を進めていく。

2 『菩提心義抄』における六即と即身成仏

末木氏がまとめた章節の情報によると『菩提心義抄』巻四では、「五 行願門」中の「三摩地門」について議論が行われる。同じく巻四の序文に基づき、もう少し詳しくその内容を解説しておく。「三摩地門」の中にも『大日経』『金剛頂経』の二種があり、前者Ⅱ『大日経』の「三摩地門」の行相は先んじて巻三で説き終わっている。続く巻四では『金剛頂経』の三摩地の行相が論じられる。また、その『金剛頂経』の「三摩地門」も大日如来の三摩地の行相の総釈と別釈に二分され、後者の別釈は、さらに（i）五部を略説する、（ii）処中の三十七部、（iii）三十七部を広く説くの三部に分割される⁽²⁸⁾。この中では、（ii）に六即成仏に関する記述が確認される。

『菩提心義抄』巻四は全九十六の問答から構成されるが、その中でも第五十四〜六十問答あたりが、（ii）についての記述といえる。その一連の問答を通じて金剛界曼荼羅を構成する諸尊、すなわち『金剛頂経』に描写される金剛界三十七尊の出現、具有、相互の渉入等をテーマに、議論が行われる。例えば、三十七尊の出現の具体的な記述が『金剛頂経』系の諸経で異なること（五十五問答）、菩提樹下でさとりを開く大日如来の化身にも三十七尊の「互相渉入」があるかどうか（五十六問答）等が問われる⁽²⁹⁾。その中、第五十七問答では、金剛界三十七尊と凡夫の結びつきについて次のような問答を行う。

問、唯仏果地四身^ニ有^リ三十七尊^一、亦為^ス三流転^ニ凡夫乃至発心以去^ニ一位中^ニ亦有^リ三十七尊^一耶。答、皆有^レ之也。若^シ大蓮華三昧経^ニ云^フ。婦^ニ命^ス本覺心法身^ニ、常住^ニ妙法心蓮台^ニ、本來莊^ニ嚴^ニ三身^ニ德^ニ、三十七尊住^ニ心城^ニ、遠離^ニ因果^ニ法然^ニ具^ニ、普門塵數^ニ諸^ニ三昧^ニ、無^レ辺^ニ德海^ニ本^ニ円満^ニ、還^レ我^ニ頂^ニ礼^ニ心諸仏^ニ云^フ。此具^ニ二義^ニ。一者本覺妙法心蓮台^ニ三十七尊住^ニ心城^ニ、是流転凡夫心性^ニ德^ニ三十七尊^一。二者発心婦^ニ命^ニ心法身^ニ還^レ我^ニ頂^ニ礼^ニ心諸仏^ニ、是発心以去^ニ一位中^ニ三十七尊^一。若依^ニ此義^ニ、不空所持^ニ金剛頂瑜伽経^ニ有^リ四種地^一。一信解行地、謂^フ三十三心^一也。二者普賢地、謂^フ二十地^一也。三大普賢地、謂^フ等覺^一也。四普照耀地、謂^フ妙覺^一也云^フ。若分^ニ析^ニ之^ニ、即四十二地^一。是同^ニ天台円教^ニ具位^一（中略）此等^ニ位^ニ中随^ニ分^ニ皆具^ニ三十七尊^一⁽³⁰⁾。

本引用文の前に、第五十六問答において「瑜祇経」「礼懺」「分別聖位」「守護経」「金剛頂瑜伽経」といった経論の記述に基づき、密教でいう

安然における六即と即身成仏

四種法身のそれぞれに金剛界三十七尊が有り、相互に渉入すると説示される⁽³¹⁾。その主張を踏まえて、続く第五十七問答では先ず、仏の「果地」である四種法身だけでなく「流転凡夫」、その発菩提心以降の一々の位にも三十七尊は存在するかと問う。三崎氏も指摘するように、その問いに対しては、同じく存在すると「本覚讀」を踏まえて解答する⁽³²⁾。また、発菩提心以後の階位として「不空所持金剛頂瑜伽經」に示されるという「信解行地」以下の「四種地」、および「天台円教具位」に言及し、それら位のすべてに分に随つて三十七尊が具わると明言する。

以上のように第五十七問答で、仏と同じく凡夫にも金剛界三十七尊が具わると結論づけた上で、続く第五十八問答では、その具体的な姿について、①理、②名字、③觀行、④相似、⑤分眞、⑥究竟の六即を踏まえて解説を試みる。問答は、凡夫の状態から「極位」まで、それぞれの境地に三十七尊が具わるなら、三十七尊は各々の境地に限つて渉入するか、あるいは凡聖の三十七尊が相互に渉入するかという問いから始まる。次の通りである。

問、若從^ニ凡夫^一乃至極位^{マテ}皆具^{スハ}三十七尊、為^ム一^ノ位^ニ三十七尊互相渉入^{スル}。又為^ム一^ノ凡聖^ノ三十七尊互相渉入^{スル}。答、亦皆渉入^{スル}。若^シ一切衆生一心^ヲ為^レ體、是一^ノ心^ニ一^ノ心識^ノ故^ニ非^ニ一切^ノ心識^ニ故、一心^ヲ分^ス為^ス一切衆生^一。一切衆生常是一^ノ心^ヲ、一心^ニ總^{シテ}具^ス三十七尊。是^レ故衆生一^ニ所^ニ具^ス三十七尊亦常一體^ニ。是流轉凡夫三十七尊互相渉入^{スル}名^ヲ為^ス理渉^一。理渉已同^ニ、事渉亦同^ニ。若聞^{カハ}二心中^ニ三十七尊互相渉入^{スル}、是名字^ノ渉入也^ニ。若信^シ此理^ニ一念觀^ニ行^{スル}自他互具^ヲ以去^ハ、是觀行^ノ渉入也^ニ。若發^ス二似位^ノ三業清淨法界海會^ノ三十七尊^ヲ、皆現^{スレハ}二身中^ニ三十七尊^ヲ、是相似^ノ渉入也^ニ。若入^シ二解行^ニ一分分隨^ニ証^シ三十七尊^ヲ、上入^リ二諸仏^ノ三十七尊^ヲ、下入^リ二衆生^ノ三十七尊^ヲ、是分証^ノ渉入也^ニ。若入^シ二妙覺究竟^ニ証^ニ得^{スレハ}三十七尊^ヲ、三世修行証有^{レモ}前後^一逮^ヒ証悟^ニ已^{レハ}無^シ去來今^一。証^ニ會^シ同位^ノ三十七尊^ヲ、亦以^テ下位乃至凡夫三十七尊^ヲ同^シ為^ス三所証^一。是究竟^ノ渉入也^ニ。⁽³³⁾

前述の質問への答えとして、先ずは凡夫も仏もその三十七尊はすべて渉入していると明言し、次にその根拠として「一心」の議論を展開する。すなわち一心は三十七尊をすべて具え、衆生の本体でもある。そこから、三十七尊は遍く一切衆生の中にも存在すると考えられる。また衆生の三十七尊の渉入についても、同じく一心の概念に触れて次のように解説する。これは「一切一心識」ではなく「一心一心識」なので、一切衆生は一心が分かれたものであり、それ故、衆生もその三十七尊も本来一体である。さらに、その三十七尊の一体・渉入は「事」の渉入も包括する

「理涉」と理解される。

引き続き引用文では、以下のようにも説かれる。衆生が具える三十七尊の渉入、つまり、その「理涉」を言葉で聞くことは「名字、渉入」であり、この理を信じて、自他の三十七尊の互具を觀想することは「觀行、渉入」である。また「三業清淨法界海會、三十七尊」を發して、その身中の三十七尊を現ずることは「相似、渉入」、そして「解行」以上で段階的に三十七尊を証し、上は諸仏の三十七尊から下は衆生のそれにまで入ることは「分証、渉入」である。最後に究極の妙覺に到達し、その三十七尊を証得して、それより下の位、凡夫の三十七尊もすべてさとした境地が「究竟、渉入」である。

改めて指摘するまでもないが『金剛頂經』の記述と関連して「即」は「渉入」に変わり、その中の「理」の内容も如来藏ではなく金剛界三十七尊だが、第五十五問答の記述は、理、名字、觀行、相似、分真、究竟の六即そのものである。さらに一連の記述は、金剛界曼荼羅の諸尊との渉入相應、つまり「瑜伽」(yoga) について述べたものでもあり、したがって、この箇所六即は、即身成仏との関連で語られた前述の六即成仏の変形とも考えられる。そして、その中では『私記』においてはつきりしなかった理即の即身成仏が、金剛界三十七尊がその身に具わり渉入する「理涉」として説き示される。

また、第五十八問答の六即成仏のもう一つの注目点として「理涉」⇨「理即」の解釈に新たな層が増えたことが、挙げられる。すなわち一切衆生に理として金剛界三十七尊が具わる根拠として、真如とも同一視される「一心」の概念を設定し、さらに、衆生とその一心⇨真如の關係を「一心、一心識」という視点から解説する。問答中に登場する「一心、一心識」と「一切、一心識」は『釈摩訶衍論』に由来し、同じく安然の『教時問答』に説かれる四一教判中で多用される心識概念でもある⁽³⁴⁾。その定義については『菩提心義抄』巻四の末尾に、次のように記される。

別円同明^ト、三真如隨緣^ハ變^{シテ}成^ル諸法^ト。而別亦明^ハ、為^リ二諸法^ト、已非^リ二即真如^ニ、但諸法中各有^ル中如性^ニ。以^テ二是諸法各体^ニ、故名^ニ二一切^ト、以^テ二本一性^ニ、故名^ニ二一心^ト、是名^ニ二一切一心識^ト也。円明^ハ下成^リ二諸法^ト、已当体真如^ハ、一色一心事理真如^ハ上、以^テ二末真如^ニ、故名^ニ二一心^ト、以^テ二本真如^ニ、故名^ニ二一心^ト。是名^ニ二一心識^ト也。⁽³⁵⁾

引用文によると一切一心識とは、一心から諸法が生じてもそれは真如そのものではなく、その諸法の内に真如の性が存在するという考え方である。つまり諸法は「各体」だから「一切」と呼ばれ、その「本一性」を一心と名付けるから一切一心識と称される。対する一心一心識は、成立した「一色」「一心」の事と理、あらゆる法がそのまま真如と捉える立場で、その「本」「末」の真如を共に一心とするところから一心一心識と名付けられるという。

新川哲雄氏は、この一切一心識と一心一心識の意味について、前述の『釈摩訶衍論』の教説から安然の心識説が展開する過程を検討して、次のようにまとめている。

すなわち、不二摩訶衍が差別の相を顕わし諸法の相として現じている時、その有情非情の一切が同一の心識なるが故に一切一心識とするのである。また、不二摩訶衍が平等の相と顕われる時、一性相なる法界は同一の心識なるが故に一心一心識とするのである。⁽³⁶⁾

第一に『釈摩訶衍論』では真如、仏のさとり領域を指して「不二摩訶衍」と呼ぶ。その「不二摩訶衍」が「差別の相」として顕れると一切一心識になり、また「平等の相」として顕れると一心一心識となる。この中、後者「一心一心識を根拠として一心「真如が平等にそのまま衆生になり、それ故、一心の三十七尊もすべて衆生に具わり、相互に深く渉入すると説かれるのである。

四 結 論

本稿では、安然が説示する即身成仏の「観」に注目し、初期の『私記』から後期の『菩提心義抄』への思想展開を検討した。具体的には、それぞれの六即と即身成仏に関する記述に注目し、次の相違点を指摘した。①『私記』では、理即の即身成仏は具体的に説かれず曖昧なままであった。②それが『菩提心義抄』になると、金剛界曼荼羅を構成する諸尊と安然独自の心識概念が導入され「理涉」として内容の充実が図られる。改めて末木氏の言葉を踏まえて指摘しておくと、ここにおいて理としての即身成仏が明確に認められ、初期の『私記』では歯止めをかけられていた本覚思想的な修行不要論への道も示されたといえる。

以上が本稿の結論だが、その意義についてももう少しだけ付言しておく、安然における他の思想の展開との類似が顕著といえる。例えば、安然が初期の『斟定草木成仏私記』で提起した草木自成仏説を『菩提心義抄』でさらに展開する際に鍵になったのも、同じく密教の曼荼羅と真言、そして真如と深く結びついた心識の概念であった。それら概念に基づいて、発菩提心が有情と非情に遍満することを主張し、草木が自ら発心・修行・成仏する根拠と定める。その構成要素だけでなく、論理の構造も『菩提心義抄』巻四の「理涉」とよく似ている。いうまでもないが、その構造は『教時問答』の四一教判、その「一仏義」にも見出される。

初期の『私記』『斟定草木成仏私記』といった著作に比べて、後期の『菩提心義抄』『教時問答』に密教の影響が色濃いことは、多数の研究で指摘され周知の事実ともいえるが、ここで重要なのは、その密教の要素の布置・理路にも、ある種のパターンが存在するということである。今後の重要な研究課題として、そのモデルを整理して提示することが挙げられる。その上で安然の思想の転換がいつどのように起こったか、そのターニング・ポイントに関しても、改めて慎重に議論する必要があると考える。

略号

『大正』 『大正新脩大藏經』

『仏全』 『大日本仏教全書』（新版、財団法人鈴木学術財団編、一九七三年）

三年）

参考文献

浅井円道『上古日本天台本門思想史』（平楽寺書店、一九七三年）

池田魯山『『摩訶止観』を読む』（春秋社、二〇一七年）

池山一切円「安然の即身成仏義私記について」（『印度学仏教学研究』二五（二）、一九七七年）

五（二）、一九七七年）

上杉文秀『日本天台史』（国書刊行会、一九七二年）

叡山学会編『安然和尚の研究』（同朋舎、一九七九年）

大久保良峻『最澄の思想と天台密教』（法蔵館、二〇一五年）

安然における六即と即身成仏

——『台密教学の研究』（法蔵館、二〇〇四年）

——『天台教学と本覚思想』（法蔵館、一九九八年）

大山公淳「五大院安然和尚について」（『中野教授古稀記念論文集』所収、

中野教授古稀記念会、一九六〇年）

——「五大院安然和尚の思想とその門下」（『密教文化』五一、一九六〇年）

〇年）

勝又俊教『密教の日本的展開』（春秋社、一九七〇年）

兼子鉄秀「安然和尚の法華龍女成仏義」（『叡山学院研究紀要』一〇、一九八七年）

九八七年）

——「安然和尚の円密義について…菩提心義抄を中心として」（『叡山学院研究紀要』八、一九八五年）

学院研究紀要』八、一九八五年）

木内堯央『日本における天台宗の展開』（木内堯央論文集二、宗教工芸社、二〇一二年）

社、二〇一二年）

——『日本における天台宗の形成』（木内堯央論文集一、宗教工藝社、二〇一二年）

——『五大院安然尊者の修道論』（『仏教の実践原理』所収、山喜房仏書林、一九七七年）

清水谷恭順『天台密教の成立に関する研究』（文一出版、一九七二年）

新川哲雄『安然の非情成仏義研究』（学習院大学、一九九二年）

末本文美士『平安初期仏教思想の研究・安然の思想形成を中心として』（オンデマンド版、春秋社、二〇一六年）

——『草木成仏の思想・安然と日本人の自然観』（サンガ、二〇一五年）

土倉宏『安然撰『普通広釈』における円戒即身成仏思想』（『印度学仏教学研究』六二（一）、二〇一三年）

——『安然撰『菩提心義抄』の五教思想に関する一考察・与奪の二論を中心に』（『東洋学研究』四〇、二〇〇三年）

福田堯穎『天台学概論』（福田老師遺徳顕彰会、一九五九年）

三崎良周『五大院安然における三摩地の思想』（『勝呂信静博士古稀記念論文集』所収、山喜房仏書林、一九九六年）

——『台密の理論と実践』（創文社、一九九四年）

——『台密の研究』（創文社、一九八八年）

水上文義『日本天台教学論・台密・神祇・古活字』（春秋社、二〇一七年）

——『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八年）

宮崎京子『日本天台における即身成仏の研究・五大院安然を中心として』（『龍谷大学大学院研究紀要』八、一九八七年）

註

- (1) 池山「一九七七」、五七七ページ上。
- (2) 池山「一九七七」、五七八ページ下。
- (3) 『普通授菩薩戒広釈』の原文は『大正』七四、七六四ページ中参照。その解釈と意義に関しては、宮崎「一九八七」、一二五ページ上、土倉「二〇一三」、九八ページ下参照。
- (4) 末木「二〇一六」、三〇四ページ。
- (5) 宮崎「一九八七」、一二五ページ下。
- (6) 『仏全』四一、八三ページ中～八四ページ上。貞観五年六月に行われた法華会では、即身成仏をめぐる激しい教理論争が起こった。『私記』末尾の記事には、その詳しい様子が記される。
- (7) この指摘に関しては、例えば浅井「一九七三」、六三七～六三八ページ参照。
- (8) 『仏全』四一、八四ページ上。
- (9) 浅井「一九七三」、六三八ページ、池山「一九七七」、五七五ページ上～下。
- (10) 『仏全』四一、六八ページ上。
- (11) 前述の通り『私記』の梗概に関しては、池山「一九七七」、五七七ページ上～五七八ページ下、末木「二〇一六」、二九二ページ参照。
- (12) 『仏全』四一、七五ページ上～中。第四十六・七問答の詳しい内容については、末木「二〇一六」、五九〇～五九一ページ参照。
- (13) 『仏全』四一、七五ページ中。
- (14) ここでの六即の理解は、智顗『摩訶止観』（『大正』四六、一〇ページ中）の記述に基づく。その現代語訳は、池田「二〇一七」、六一～六九ページ参照。

- (15) 末木「二〇一六」、三〇三ページ。
- (16) 『仏全』四一、七五ページ中下。
- (17) 末木「二〇一六」、三〇四ページ。
- (18) 『大正』七五、四五一ページ上。
- (19) 『大正』七五、五五六ページ下。
- (20) 土倉「二〇〇三」、一〇三ページ下。
- (21) 浅井「一九七三」、六三四ページ。
- (22) 末木「二〇一六」、三三二～三三三ページ。
- (23) 『大正』七五、四七二ページ上中。
- (24) 引用文の解釈に関しては、末木「二〇一六」、三三四ページ参照。
- (25) 末木「二〇一六」、三三四ページ。
- (26) 『大正』七五、四七二ページ中。
- (27) 例えば「天台有云」と述べて、即身成仏が「心」の作仏か「身」の作仏か、後者だとして成道の際の肉身の「捨」をどう捉えるか等、

- 貞観五年の法華会で議論された問題に言及する。詳しくは『大正』七五、四七二ページ中参照。また、この箇所解釈は、大久保「二〇〇四」、三〇五～三〇六ページ参照。
- (28) 『菩提心義抄』巻四の構成に関しては、『大正』七五、五一三ページ上参照。
- (29) 『大正』七五、五二四ページ下。
- (30) 『大正』七五、五二四ページ下～五二五ページ上。
- (31) 『大正』七五、五二四ページ下。
- (32) 三崎「一九九四」、五七～五八ページ。
- (33) 『大正』七五、五二五ページ上中。
- (34) 『教時問答』の四一教判で用いられる心識概念の理解は、末木「二〇一六」、四三七～四四一ページ参照。
- (35) 『大正』七五、五三六ページ下。
- (36) 新川「一九九二」、二二七ページ。